

日本占領下の宗教政策：いわゆる比島宗教宣撫班の活動を 中心として——寺田 勇文

1941年12月8日、太平洋戦争の開始とともに日本軍はフィリピンに侵攻し、42年1月2日にマニラ陥落、翌3日には軍政を施行した。その後43年10月14日に、日本はホセ=P=ラウレルを大統領とするフィリピン共和国の「独立」を承認した。これによりいわゆる軍政は終了したが、日本軍はフィリピン「独立」後もひきつづき同地にとどまり実質的な占領統治をおこなった。

フィリピンはすでに1934年のタイディングス=マックダフィ法により、1946年の対米独立が約束されており、また16世紀後半より長くスペインおよびアメリカの植民地であったことから、フィリピン人の80%がカトリック、その他の教派を含めると90%がキリスト教徒であるという、他の南方占領地にはみられない特殊な事情があった。占領下のフィリピンで有効な統治を進めるためには、コモンウェルス政府要人をはじめとするフィリピン人政治エリート、カトリック教会を統括するマニラ大司教以下のヒエラルキー、キリスト教徒である一般民衆の理解と支持をとりつける必要があった。そのためいわゆる比島宗教宣撫班が上陸軍の一部として派遣され、1941年開戦時より42年末までの1年間フィリピンにおいて宗教宣撫工作に従事した。宗教宣撫班はフィリピンのキリスト教界の「日本軍に対する不平希望の仲介斡旋」を行うと同時に、宗教事情を調査し、日本占領下における対キリスト教（カトリック）対策立案のためのデータを提供した。

この報告では、最近発掘された宗教宣撫班関係の一次史料およびインタビュー調査から得られたデータにもとづいて、宗教宣撫班の活動と対比宗教（とくにカトリック）政策について検討することとしたい。

特別講演

Southeast Asian Linguistic Traditions in the Philippines ——Lawrence A. Reid

This paper discusses the occupation of the Philippines by Austronesian speaking peoples and explains how Philippine linguistic traditions ultimately derive from mainland Southeast Asia. It divides the prehistory of the Philippines into two periods, B. A. "Before the Arrival of the Austronesians", and A. A. "After the Arrival of the Austronesians". The first period involves only the aboriginal Australoid population of the Philippines, the "A. A. Period of Philippine Prehistory", involves both the Australoid population and the Mongoloid populations of the Philippines.

Archaeological evidence both from the Philippines and areas to the south in Indonesia place the boundary between these two periods at around 3,500 B. C.